マスクだらけの功罪（その2）

2020 年 4 月 7 日に東京など 7 都府県を対象に、法律に基づく「緊急事態宣言」が発令され、外出自粛・休校・施設や店舗などの使用制限などが要請されました。7 都府県意外に対しては「密閉空間、密集場所、密接場面」を避けるよう要請されています。そして個々の感染予防対策としては「手洗いと咳エチケット」が繰り返し伝えられています。
２月 17 日の「マスクだらけの功罪」では、2019年12月に中国武漢に端を発した新型コロナウイルス感染症が日本国内ではまだ感染拡大の初期の段階であったにもかかわらず、マスクの着用や買い占めについて異常な事態になっていると書きました。4 ヶ月後の現況を踏まえて、再びマスクについて書きます。

かぜなどのウイルス感染症と同様に初期の段階でマスクが有効なのは、感染者が他人に移さないために着用するときに限られます。普通のマスク着用ではウイルス感染を防ぐことは出来ないからです。しかし感染が怖いからと安心のためにマスクを買い続ける人々が増えて、本当に必要な医療機関や介護施設にマスク不足が生じ集団感染にもつながりました。そしていま、クラスター感染を越えて市中感染に広がろうとしています。この状態では自覚症状がなくてもすべての人が感染源になる可能性があるということになり、この時こそマスクが必要だったのですが、無駄な使用により肝心なときにマスクが足りなくなったのです。
マスク着用の習慣がなかった欧米でもあっという間に感染が広がり、急に全員マスク着用の映像が見られるようになりましたが感染拡大を抑えることはできませんでした。

各地で日々報告される感染者情報では必ずマスクを着けていたかどうかが報告され、着けていれば濃厚接触の可能性は低いと安心するような風潮です。話をすれば隙間だらけのマスクの脇から飛沫は飛び出すし、強く咳・くしゃみをしたときはマスク自体からも漏れ出ることが実験で分かっています。
それでも感染しているかもしれない人のマスク着用はかなりの効果があります。市中感染拡大という新フェーズに入った今は、市民は様々な工夫をして手作りマスクなどでしのぐしかないでしょう。
マスク供給が行き渡り始めたら、まず必要なところを優先するためにも。

戸田　2020.04.09